

平成 15 年度第 2 回府中市次世代育成支援行動計画検討協議会議事録

時間 平成 16 年 2 月 10 日 14:00 ~ 16:30
場所 府中市役所北庁舎 3 階第 5 会議室
出席委員 浅田委員 小川委員 小熊委員 北川委員 北場委員 木下委員 澤野委員 杉村委員
庭山委員 平田委員 山村委員 弓削田委員
欠席委員 北村委員 田口委員

次第

1. 開会
2. 傍聴人の入場について
3. 資料の確認
4. 府中市子育てに関する市民意向調査の回収状況について

議題

1. 第 1 回府中市次世代育成支援行動計画検討協議会議事録の記載内容の確認について
2. 資料 1 「府中市内における児童に関する施設の位置図と児童の人口数地図」及び資料 2 「少子化の動向」、資料 3 「子育て関係者・施策一覧」を参考に各委員が考える現在の子育て環境や支援について
3. 第 3 回府中市次世代育成支援行動計画検討協議会の開催日と議題について
4. その他

1. 開会
2. 傍聴人の入場について

子育て支援課長

皆様、お待たせしました。定刻を過ぎましたので、会議のほうを始めさせていただきます。まず、出欠席状況ですが、田口委員と北村委員から、本日体調不良等のことで、ご欠席の連絡をいただいております。それから、この会議につきまして、傍聴のご案内を広報等でしましたところ、2 名の方のご応募がありました。只今から入っていただいております。

委員会一同 了承

3．資料の確認

子育て支援課長

本日、議事に入る前に、私の方で若干、確認・連絡等をさせていただきます。まず、資料の確認ですが、事前に府中市内における児童に関する施設の地図と、児童の人口数の地図ということで、4つに折ったものをお送りしておりましたが、線の区分等、見にくいところがありまして、本日、お手元にごさいます、別のものに差し替えさせていただきます。内容としましては、保育所、幼稚園、小学校、中学校と、子育て支援関連の施設を地図に落とししたものです。これについては、後ほどご説明します。

それからこの関係の地図の追加で、本日、「府中市町別児童人口」というA4の縦刷りのもの、それから、さきほどの地図を文化センター圏域で落とししたもので、1枚目が中央文化センター圏域となっていますが、先ほどの地図を文化センターブロックで分けた地図、それからA4の横長で、追加ですが、保育関係施設が中心ですが、施設を落とししたもので、それから、文化センターやひろば事業の実施施設を落としした子育てひろば等という地図、これを図面関係では、本日新たなものとしてお渡ししております。それから、さきほどの地図に関連しまして、「ふちゅうガイド」というもので、府中市の案内があります。本日ご議論いただいたところで、最後の話になったときに、より細かなものを見ていただくためにお使いいただければと思っておりました。

それから、ちょっと薄いのですが、府中市の白図で2万7000分の1、これは町の名前をイメージするときに使っていただければと思います。それから事前に配布しました資料2で、「少子化の動向と背景について」で、一部数字の訂正、資料の追加がございまして、これに関しましては、お手元にごさいますものに差し替えをお願いいたします。それから、まだ若干今の範囲でご説明できていない資料がございまして、これは後ほど、会長のほうから補足をいただければと思います。

4．府中市子育てに関する市民意向調査の回収状況について

子育て支援課長

次に連絡事項ですが、1月の中旬から実施をしておりました市民意向調査、ニーズ調査の関係ですが、2月1日現在の回収状況ですけれども、アンケート発送件数が5000通、そのうち2674通を回収しております。回収率が53.5%という状況です。この関連で、市民の方からの反響というか、ご意見ですけれども、7件ほどございまして、その中で一番多かったのは、返信期限を、アンケートの一番後ろで誤っておりまして、16年とするところを15年となっていたという、これについてのお問い合わせです。それから、障害を持つ親御さんから、障害児の預かり保育への質問がなかったという点。もっと質問を設けてほしかったというご意見。それから、保育といいますが、子どもを預けることに内容の重点が置かれすぎているのではないかという指摘、などをいただいております。そして、この調査の概要につきましては、次回、3月23日の会議でご報告をさせていただきたいと思っております。議事に入る前の連絡事項は以上です。会長、議事のほうを

お願いいたします。

会長

それでは、今、資料の確認がございましたけれども、今日第2回目の位置づけとしましては、3回目でアンケート調査の概要が発表される前ですので、前回終わりのほうでかなりいくつかご議論が出ました。今日はできるだけテーマを明確にして議論をしましょうということで、議論の素材になるような資料を用意しております。ですから、特にこのテーマということで私のほうでは設定しませんので、皆さんご自由に発言していただいて結構なのですが、また後で資料説明をしますが、今日参考までに、資料の3という、これは後でちょっとご説明しますが、「子育て関係者・施策一覧」というもので、私が勝手に作ったものです。これは、子ども、家庭・家族、地域・コミュニティ、行政、企業という、5つの役者さん、舞台上いう役者さんが関係しているというところでの関係者の見取り図です。

もう1つ、これは急遽作っていただいたものですが、市町村行動計画の、前回ご説明していただいた7項目の柱、その柱ごとにまた黒印でいくつかありますけれども、これは事項です。つまり、子育ての役割をする役者さんと、どういうことをやるのかという事項と、先ほどご説明がありましたように具体的な府中市の行政の地図なりマップ、地理的な感覚の資料を、素材として3つお示しをします。皆さんが発言をしていただいたことが、誰にとつての、関係者の誰に関わるのか、どういう分野に関わることなのか、というところを皆さんで共通に認識していただいて、それに関連するテーマがあれば出していただくし、あるいは別のテーマであれば、どこに飛びましたというのを、話している私たちが理解できるような地図みたいなものですね。何丁目何番地について、今私は発言をしました、というのがわかるような素材だけを用意させていただきました。これで皆さんから自由に発言していただきたいということでございます。

それではまず、資料の1と2の説明を事務局のほうからお願いいたします。

子育て支援課長

それではまず、資料1、この大きな図面です。まず、地図のベースになっている色の区分ですが、町別に、0歳から6歳の16年1月1日の人口を面積、平方キロ単位で割っております。例えば、多磨町ですと、0歳から6歳が217人おりまして、これを面積1.7km²で割って、児童人口密度129.2ですから、一番上の0から300の、少し色の薄い状態、こういう形でまず児童の状況を、色で、町別で区分しています。その上に、これは細かくて、本当に見づらくて申し訳ないのですが、保育所、幼稚園、それから文化センター、小学校、中学校、学童クラブ、そういった子育て関連の資源となるものを落としましたものです。これは前回の中で、こういったものが議論の材料としてどうかというご提案がありましたので作成をしましたが、我々の思いとはちょっと違って、少し見づらいものになっております。そこで、今回、お示ししている文化センター圏域のもの、これはさらに細かく分けておりますので、これを見ますと、府中市の中の地図が、詳しい方ですと大まかにイメージができるのではないかと思います。それから、本日お配りした施設配置図と子育てひろばの図面です。この「施設配置」のほうは、同じような人口密度の地図をベー

スにして、そこに保育所と幼稚園、認可外保育施設関係を入れて、要は保育の部分、保育、幼稚園の部分だけを抜き出した図面です。それから、「子育てひろば等」というのは、地図でいきますと、一番北側のところに茶色い建物がありまして、「子ども家庭支援センターしらとり」、それからそのほかに「文化センター」、「子育てひろば・ポップコーン」を実施している会場、保育園でやっている子育て広場、私立幼稚園の17箇所ある幼稚園のうち、未就園児保育をやっているところを落としたものです。

それから、資料2は、「少子化の動向と背景について」ということで整理をさせていただいているものです。若干読みながら説明いたします。まず、「20歳未満人口は、1980年代以降減少」していて、「1980年の3578万人から2002年には2533万人」と、この20年間で3割減っているということですが、これは図表1と書いてありますが、裏の図表2で見ていただきますと、20歳未満ですから、2002年のところで見いただきますと、4番目の黒いところ、これがラインになります。この動きが今の最初の文章で表現しているところです。少し行を飛びまして、合計特殊出生率ですが、「総人口維持水準とされる2.08を1974年以降一貫して下回って」おりまして、「2002年には史上最低の1.32まで落ち込んでいる」という表でございます。「このままでは、2年後の2006年という極めて近い将来に、総人口が減少に転じる」という資料です。新聞、テレビ等でよく出ているものです。

次のページにいきまして、「婚姻をめぐる状況」ということで、婚姻率と離婚率の推移をグラフで表しております。まず「婚姻率は、1971年のピークを境に、1970年代後半まで急激に減少」しておりますが、その後は安定して、8万件前後で推移している。これが上の図です。離婚率ですが、戦後、だんだんに上昇を始めまして、1983年からは一端減少の傾向にありましたが、1988年から再び上昇を始めております。「2001年には過去最高の2.35を記録した」という数字となっております。

その下ですが、また結婚率の減少にともない、「平均初婚年齢は男女ともに、出会いの形態に関わらず高くなっており、晩婚化が進んでいること」がわかります。この関係が4ページのところに細かく数字で出ておりますが、説明のほうは省略をさせていただきます。

5ページにいきまして、「出生の動向」ということで、まず、1990年代から2002年にかけての合計特殊出生率で、全国と東京都と府中市の比較ですが、その下のグラフにおける、一番上が全国、その下の点線が府中市、その下の少し間隔が広い点線が東京都の状況になっています。府中市は全国値と比較しますと、0.01ポイント程度、東京都は0.02ポイント前後、国より低くなった率で推移しております。府中市においてはこのグラフを見るとわかりますが、99年から02年においてほぼ横ばいとなっていて、このグラフ上からは、減少傾向に歯止めがかかっているという様子に見てとれます。次が、母親を5歳刻みの年齢別出生率で見た数字ですが、これは6ページの上の表です。どの年齢階層別においても、出生率は大幅に低下しております。特に「昭和25年、45年当時、率が高かった20~24歳、25~29歳」での低下が激しくなっています。そして昭和25年から平成13年までの51年間で、25~29歳の女子人口1,000人あたり237.7人から96.2人と半分以上に、20~24歳では161.4人から40.1人と4分の1以下と大幅に減少しております。段落が変わったところですが、「ほぼ子どもを産み終えた結婚継続期間15~19年の夫婦

の平均出生子ども数である完全出生率は、戦後大きく低下」をしております。第6回調査におきまして2.2人となり、以後30年間ほぼこの数字で安定をしております。

次の段落にいきまして、「妻の年齢別に夫婦の平均出生子ども数の推移をみると、1990年前後、20歳代後半から30歳代前半で最初の低下がみられ、その低下傾向は90年代半ばでは30後半にも広がりを見せています。「25～39歳層の継続的低下に反して、20歳代前半の若い層では、第12回の調査では上昇がみられ、子ども数低下に歯止めがかかっている」という状況が、次のページの表でございます。

8ページにいきまして、「少子化の背景要因」というところで、「少子化の背景要因として、女性の晩婚化、未婚率の上昇が挙げられるが、その要因と考えられるのがパラサイトシングルと呼ばれている人の増加である。パラサイトシングルが増えている要因についての質問結果が図表9で、子どもの自立心の低さとそれを寛容に受け入れる富裕な親の存在、未婚に対する本人・世間の考えの変化などが、子どもが結婚せず親の経済的基盤によりかかる誘因をつくっていること」がうかがえます。「また、結婚した場合でも、夫婦が理想とする子ども数を生むことをためらう傾向」が見られる。「予定子ども数が理想子ども数を下回る理由として、養育費の負担をあげる夫婦の割合」が2番目に高く、大きく引き離して高いことがわかる、というのが次の表です。この経済的云々というのは、市のほうでもいろいろな調査をやったことがありますが、やはり60%代という高い回答がこの項目になっております。

次ですが、「近年、単純に夫婦が共に就業している世帯の比率を見ると横ばいないし減少傾向にあるが、経済のサービス化に伴って、夫婦が共に『被雇用者として』就業している世帯の比率はむしろ増加しており、2000年には、全世帯では32%、子どものいる世帯に限れば36%に達している」というのが次の図になります。「都市化の進展に伴う近隣住民同士の交流の希薄化により、時として子育ては『孤育て』と揶揄されるような孤独な作業となりつつあり、そうした中で、子育ての負担感は、共働きよりもその他世帯のほうでむしろ大きいという傾向が見受けられる」ようになっております。「子育て不安を原因とする児童虐待のケースは、在宅で子育てを行う家庭にむしろ多い、ということも度々指摘されているところ」であります。

そして、最後の11ページについているのが、前回お届けした資料には付いてないもので、年齢別（3区分）の人口と高齢化率の推移です。以上でございます。

会長

それでは、私が補足というのも僭越なのですが、なかなかこの資料だけではポイントはわかりづらいと思いますので、ちょっと解説をさせていただきます。

6ページの上の図表6をご覧頂きたいのですが、「母親の年齢階層別出生率（全国）」と書いてあります。これは、年齢別の出生率で、自然出生率というものですが、むしろ今出生率というと、合計特殊出生率のことをいうのですが、それが1.32とか2とかいわれています。これはどういうことかということ、1人の女性が生涯に何人の子どもを産むかという数字で、2というのは2人で、1.32人というのは、1人が平均1.32人しか産まないという数字です。

具体的に合計特殊出生率というのはどういうふうに計算するかということ、図表6の、例えば平

成 13 年で、15 歳から 49 歳までの年齢別の自然出生率を各年齢ごとに足しあげたものなのです。これは、人口 1000 人に対して、これは 250 人となっていますが、これを 1 人というふうに直しますと、一番下が 25 というのは実は 0.025 人で、250 人ですから、1000 分の 250 人というのは 0.25 になります。この 5 歳階級の数字をすべて足しあげたものが、一番新しい数字で 1.32 人ということです。つまり、このパターンで 1 人の女性が年齢別に平均的にこういう出生パターンを取るとすると、生涯何人子どもを産むかというのが 1.32 人ということです。この出生率と人口動態とがどういう関係にあるかというのが、今日の資料における一番最後の、ページが付いていないグラフになります。なぜ少子化がこれほど問題視され、政府が音頭を取って少子化が大変だ、大変だという議論をするかということ、実は合計特殊出生率が、単に数字が下がったということだけでなしに、1 人の女性が平均 2 人ちょっとの子どもを産むということに意味があるのです。それが上回るか下回るかで大きな違いがあります。1 人の女性が平均 2 人強の子どもを産むということは、必ず 1 人は女の子が生まれる。だいたい男の子が生まれる率と女の子が生まれる率は同じで、ちょっと男の子の方が率は高いのですが、2.08 か 2.06 くらい平均であると、必ず 1 人の女性が生まれる。つまり 1 人の女性が次の世代の 1 人の女性を産んでくれるので、このレベルであれば人口が変わらないのです。この数字を上回ると人口が増え、下回ると人口が減るのです。日本は 1975 年以降、この 2 の数字を下回っております。もう 4 半世紀以上、この数字を下回っているのです、ということになるかということ、人口は減ります。それで、2006 年から、あと 2 年先から、総人口が減ることなのです。

それが一番最後のグラフで、この富士山のような山が日本の総人口のカーブで、今、まだ本当にこの頂点の一手手前くらいにあって、2006 年から総人口が減るとい人口予測が立っているのですけれども、総人口が減るといだけでなしに、年齢別に 3 区分に人口を区分してみると、当然子どもが少なくなりますから、0 歳から 14 歳の子どもの数は減っていきます。その子どもがだんだん成人しきますから、真中層も減っていきます。でも高齢者はなかなか死なないのですね。ということは、高齢化なのです。今、このグラフのカーブがありますが、現在高齢化率というのは大体 17、18% くらいのところなのですけれども、少子化が急速に進むことによって、日本の高齢化というのは急速に進みまして、今世紀の半ばには 3 人に 1 人が 65 歳以上人口ということになります。もちろん、高齢者の長寿ということもありますが、むしろ高齢化の要因は、急速な少子化が日本の急速な高齢化の原因になっているということなのです。高齢化が急速に進むと、働く世代が少なくなって労働力が減るから日本の経済が冷え込むであるとか、あるいは社会保障、特に年金制度にとってみると、若い世代の保険料の負担がすごく大変になってきます。これは単に、子育ては個人の自由とかたちで全く手を拱いていくわけにもいかない。かといって、産めよ増やせよという策は今さら取れないから、できるだけ子育てが障害にならないような行政政策をやっていって、少しでも少子化のスピードを緩めていかなければ、国としても大変です。ということで、この少子化がわかって以来、10 数年、保育所を整備しなければならないとか何とか、いろんなことをやりはじめてきたわけです。

ところが、少子化の原因として、今までは晩婚化、結婚年齢が遅くなる、そのことによって、最終的には 2 人くらい子どもを産むのだけれども、結婚年齢が遅くなっているために、一時的に

出生率が下がっているのだろうという形で、まあ大変だけれども、また復活するよ、というかなり楽観的な見通しを立てていたのですが、この 2002 年の推計で、結婚した夫婦の出生率も下がっていく傾向にある、そうすると今の数字よりも、また、将来は回復するだろうという予測は少し甘すぎるのではないかとということで、将来的にも今の出生率とほとんど変わらないという将来推計を、実はこの時点でやりはじめた。そうしたら、将来 3 人に 1 人の高齢化率、これはきついなということで、今までのような政策をやるだけでは、とてもではなくだめだと。働いていない子育て者、母親に対しても、いろいろな子育て支援策をしていかないと、これは大変だぞ、ということで、「少子化対策プラスワン」という政策を打ち出し、今度の次世代対策の流れになってきたということです。ですから、少子化ということはずいぶん前から認識されてきましたが、今、我々たちが関わっている計画というのは、かなり政府も、これは深刻だと、働いている女性だけの保育所政策だけではだめだと。働いていない、いわゆる幼稚園対象児童に対しても、いろいろな政策を打ち出していかなければいけないぞ、という少し気を引き締めなおしたという状況で出てきた計画であるということです。

確かに、本当にこの急速な高齢化は、ヨーロッパ諸国でも、ここまでの急速な、しかも短時間での高齢化率というのは予測されていません。ただ、韓国とか中国は、逆に言えば日本よりももっと高スピードで同じような状況の見通しが立っていますので、日本の政策に非常に注目しています。日本の政策を何とか自分たちの国にはやく取り入れなければならないというように、注目しています。私たちが、日本がそういう状況にあるということです。

説明がこれだけでは不足だと思いましたので、私が週刊誌で書いたもので僭越なのですが、参考資料として載せていただきました。私の個人的な意見に関わる部分は、全く私的なことですので、『はじめに』あたりを少し、この資料の補足的な意味でお読みいただければと思います。私の意見は全く無視していただいて結構です。

それと、最後に資料 3 ですが、これは今日の議論に少しでも役立てていただきたいということで、子育てに関わる次元といいますが、関係者が非常に多岐にわたっているわけですね。そもそも、一口に子どもと言っても、0 歳児から 18 歳まで、高校生くらいまであるわけですし、例えば不登校とか引きこもりとかであれば、20 代、30 代でもついてくるという話もありますので、子どもの対象年齢によって話の中身が変わってきます。だから、発言をされるときに、どの年齢の子どものことを言っているのかということを少しコメントしていただくと、わかりやすくなるかなと思います。それと、子育てとといっても、まず、一番の母親、家族、まあ母親、父親というご夫婦の関係と、これも今、離婚率の話が出ましたが、必ずしもご夫婦揃っていらっしゃるわけではない。片親という世帯も結構多くありますし、あるいはご夫婦がちゃんと揃っていても、子育てに関する考えは全然違うご夫婦もいらっしゃるという、家族内の問題も大変大きいですし、それとご両親のおじいちゃん、おばあちゃん、あるいはそのご兄弟が子育てに関わっていらっしゃるかどうかが、近年では親族ネットワークから近隣ネットワークという言葉が使われていますけれども、家族の中での子育て支援策をどうするのかということも、実は非常に大きい問題です。それと、行政の保育所や幼稚園、学童保育とか、あるいはもう少し大きくなると虐待とかの児童相談所とかの行政施策の間に、地域の近隣の子育てネットワークが、実は昔はたくさんあった

わけですね。今、この地域関係が非常に希薄になっていて、なかなかない。行政施策としては、民生委員、児童委員さんがいらっしゃいますし、ここのメンバーの方も関わっていらっしゃるNPOという新しい地域のネットワークづくりに参加していらっしゃる方もいます。もちろん、組織ではない、本当の意味での住民の助け合いということもあります。実はここのところが、今非常に注目をされているわけです。昔はごく当たり前にあったものが、どんどん希薄化してしまって、家族がいきなり行政にしかつなげていられない。そのあたりを、どこの議論をしているのかを理解するときに利用していただければ。それと、学校とか所得保障の問題もありますし。今日急遽作った、行動計画の7項目、7つの柱です。一応、資料説明を終わらせていただくと同時に、これからご自由に発言をしていただければと思います。

委員

私は子育て支援というか、少子化対策に反対ではありませんけれども、今、会長さんが言われた、まさにそういう考え方、アプローチの仕方にこそ、問題があるのではないかと思います。たぶんこの意見に皆さんは賛成なさらないと思いますけれど、要は、おっしゃっていることは、すべてお金のことなのですよ。国の経済力、年金制度、税金、すべてお金のパラダイムで、人口が減ったら大変になる、だから産めよ増やせよ。お金のパラダイムで産めよ増やせよと言っているわけですから、産むほうは、いや子どもができたらお金が大変だ、生活費が大変だ、と。その経済観のパラダイムだけでずっと論じているから、いつまでたっても良いほうに回らない。どうして、家族の愛とか子どものすばらしさとか、そういう、もっと規範的なものを訴えないのか。まあそれは、行政がやっているから、そうになってしまうということが1つあるし、もっと大きい問題は、少子化で国力がどうなる、その中で私たちがどうやって自立して、国に頼らないで生きていくかという道を探ることのほうがよっぽど大事であって、少子化はいけないことだ、だから子どもを増やせという論理で、若い親にアプローチすること自体が産まない考えを作っていく、私はそう思います。別にこれでこの会議の腰を折るつもりはないですが、会長が言われたように、『少子化は悪いことだ、だからみんなでなんとかしよう。』それは国の金庫番の人たちが言っていることであって、それは私たちの生活には関係ないのです。むしろ私たちは、国の財政がどうなるかと、きちんと生きていける仕事や能力をつけることのほうがよっぽど大事であると思います。

会長

のっけから、かなり挑戦的なご意見が出されましたが、別に私がお金のためとか行政のために子育てをしるというわけではないのですが、少なくとも、今の国の政策はそういう流れから出てきている。逆に言えば、それをどう賢く利用し、子育てのために使って、行政の資源を使って自分たちがどうやって良い子育てをするかという戦略づくりをしてはどうか、ということです。国がそうやるということで法律ができていますので、少なくとも計画を作ることまではやらなければいけないというだけの話です。今のご意見を踏まえて、確かに根本的なご意見だと思います。

副会長

委員の意見に似たようなところもあるのですが、最終的に言えば、国の施策としては、お金に関わることで解決していかないと、この問題はどうにもならないのではないかな、という気持ちがあります。

前回のエンゼルプランで、いろいろな保育所、施設にお金をばら撒いて、大失敗をしたという評価があるようではすけれども、そのときにも私は思ったのですが、例えば0～18歳までとか、0～12歳までの子どもがいる家庭には、1人あたり5万円なら5万円を、いかなる状況にしろ、親の収入が多かろうが少なかろうが、この額は適当かどうかわかりませんが、1人あたりにそのお金を出して、私立の小学校に入れようが、保育所に入れようが、幼稚園に入れようが、あなたがたの勝手です。応分に施設に対してお支払いなさい、というのをバウチャー制度とか言うのですか、会長。

会長

お金ではなくて利用券という考えですね。

副会長

そういうお考えがあるようではすけれども、今、例えば幼稚園にいる子と保育園にいる子と家庭にいる子というのは歴然たる差があります。国から出るお金に関して、市町村から出るお金に関して、歴然たる差がある。お金お金というわけではありませんが、各種アンケートでも6割以上の方々が、負担が大きいと言っているならば、施設設備の部分に お金をかけるよりも、あなたたちにまかせるからこのお金はあげると、どうしてできないのかな、と思います。だったら保育所でも10万円、20万円取っても、お子さんをお預かりするところもあるでしょうし、幼稚園も5万円10万円取ってもお預かりしてもOKということもできるでしょうし。

フランスはそういうのをやっているそうだと聞いたのですが、そうですか。フランスの児童手当は非常に高額だと。

会長

はい。フランスは家族手当というのがあって、それはもちろん企業のところから発生したのですけれども、というのも外国の場合は年功序列賃金がなくて、仕事が決まれば、若い人であろうが、子どもをたくさん持っている家庭にはやはり補助しなければいけないのですね。企業家族手当が国の手当てになったということです。フランス、ベルギーはそれが非常に分厚いというわけです。

副会長

ということで、そういうふうにしたほうが、私はいいのではないかなと思います。お金が原点ではなくて、委員のように挑戦的ではなくて、やはりこのままずっといくと、理論的には人口が1,000人になってしまうということもあり得るのですよね。日本の人口が。このままの人口ですと出生率が減っていくと、1万人とか1,000人になることもあり得るという話を聞いたことが

あるのですけれども、やはり滅亡の危機でもあるわけだから、何としてでも人口は維持をしたい。

どうも、子どもを大切にするという視点で考えているのでしょうかけれども、施設設備とか補助金にばかりお金をかけて、無駄づかいをしているような、納税者としては気がする、というのであれば、個々人にお金をあげてしまったらどうかと。幼稚園に行くまいが、保育所に行くまいが構わないと。あなたの責任でやりなさい、と。ただし、12歳なり18歳までなら、どんなにお金があっても、月に何万かはあなたにあげるよ、と。そうすると、この子育ての費用負担が多いというのは解消するのでしょうかね。厚生省の予算は、文部科学省の予算の約9倍あるそうだけれども、あんまり余分なものを考えないで、そうやってくれれば、解決するのではないかとも思っています。ですから、ニーズ調査にしても何にしても、どんな答えが出るかは知りませんが、あまりこねくり回さないで、それができれば、かなり革新的なことだと思えるのですけれども。会長、ご質問ですけれども、ドイツは今の日本と同じようなことをやって、出生率は上がっていないのですよね。確か。そうではないですか。

会長

出生率は若干、最近少し上がりました。

副会長

少し上がりましたか。あれは、似たようなことをやっていませんか。

会長

ドイツは、伝統的に家族政策というものをやっています、女性が子育てをするために、むしろ専念できるようにするような政策を援助しているのですね。どちらかというと。

副会長

それで少しアップしたということですね。

会長

それだけかどうかはわかりませんが。

副会長

すみません。おわりました。

委員

すみません。今のお話ですごくわかりやすくなってきて、私もどういう意見ということではないのですが、今までのお話の中で、要するに、一番大切なのは人間が生まれて育つ3つ子、3つまでの間に100年のその人の人格が決まると、私たちは親からそういうふうに言葉で言われて育児をしてきたのです。私の子育ての頃はまだ、育児書とかいうのは本当に限られた数あるくらい

で、まず子どもを育てるのは親、自分を育ててくれた親、その前の親というふうに。私がこの歳になってみますと、やはり自分が3歳までに受けた言葉、ああ、こういうことなのかな、というふうに感じるがあります。ですから、3つ子の魂というのは、やはり日本が文化として考えてきた中の1つなのかな、とを感じるようになりました。

おっしゃるように、お金を使うことが、もちろんこの会議を開く意味でもありますよね。それでないと、国は結局、法律を子どものために作ってくれたのですから、それを使うことはすばらしいことだと思います。いろんな建物に使ったり、いろんな今までやっていらして、その結果がいまいちということなので、私が一番感じるのは、結婚したお父さん、お母さんに子どもができて、まだ白紙ですよ。誰も経験がない、0からの出発ですから、そのときに親と子どもと3人で、できる場所もありますけれど、昔はその周りにたくさんいたのです。電車に乗ろうと、玄関を出ようと、家にいても人が来る。だから、それほど今みたいに孤独ではないと思います。今の若いお母さんは機械に囲まれた生活の中で、子どもを育てるというのはすごく大変だなと思います。すごく立派だと思います。私になんかできなかった、というか今やれと言われてもできないと思います。ですから、その中で頑張っているお母さんたちに手助けできるというのは、やはり人間しかいないと思います。お金ではなくて。だけれども、そのお金の使い方をどういうふうに使うかといったならば、育成、人を育てる、そのおかげでアドバイスできるような、例えば保健師さんとか、そういった人たちがたくさんいたら、すごくお金以上に役に立つと思います。そういう、人を増やす。その人たちに少しでも交通費なりを出して、保健師さんという資格がなくても、もし人材育成をできる場所があれば、その人たちが家庭に散って行っても芽になると思いますので、お金というならそういう方にお金を使う道もあるのではないかなと。人材の育成というところに使えるのではないかなと思ったものですから。

会長

今のお話で、人材育成ということは、資料の3でいいますと、保育士さんであるとか、幼稚園の教育の方であるとか、そういう肩書きではなくて・・・。

委員

いいえ。そういうのではなくて、一応子育てが終われば、肩書きがなくても、「子どもが夜泣いたらどうしますか」と言われれば、私だったら、「昼間誰か訪問してきました?」「刺激を与えました?」と言います。そういうことがあると、子どもは確かに興奮します。それが全部とは言いきれませんが、そんなふうにはアドバイスができる、そういう人たちがもし、お母さんのそばに定期的にご訪問できたら、ずいぶん楽じゃないかなと思って。

会長

例えば今、ボランティアグループとか子育てグループみたいな仲間同士とか、あるいは子育てが終わったお母さんたちが、他の子育て中のお母さんたちを支援するというようなことで、それが大きくなるとNPOという組織になるのですよね。今日も代表者がいらっやっていますけれ

ども。そういうNPOの卵みたいなものを育てるとか、支援するということでもあるのでしょうか。

委員

はい。

会長

お金の話と、お金をサービスに替えてという、具体的にお金をサービスに替えるためにどういうやり方をするかというのは問題ですけれども、お金も必要だけれどもお金だけではないサービスの必要がありますね。マンパワー、サービスを提供する人の育成が大切だというお話だったと思います。何でも思いついたことがあればどうぞ。発言していただかないと話が進みませんので、

副会長

すみません、ではもう1回。極端なお話をして失礼をしましたが、たぶん皆さんからご意見が出なくて困っている原点というのは、国の持っている子育て観がないということだと思っております。日本がどういうふうに子どもを育てたいとか、どういう子に育てほしいとか、そういう子育て観、教育観がしっかりしていないなど。今回の法律に関しても、働く女性や家庭を支援すると言っているけれども、どういう子どもたちをみんなで育てていくのかという像がたぶん見えてこない。

では、よその国はどうなのかというと、例えばアメリカの小学校みたいに、学校に行くといつも国歌を歌って、それが良いか悪いかではありませんよ。国家を歌って、自分たちは国のために役に立つ国民になるのだというような教育をしているというのははっきり見えるのですが、日本は何を、どういう子どもを育てたいか、どういうふうにしたいのかという国の教育観みたいな全体像が見えないから、地域に下ろしてやりなさいと言ったって、どこを見ていいのか何をしたいのかわからない。

だから私は、極論で各家庭に下ろしてしまえと。お金をあげて、各家庭に自由に選択させてはどうかというのは、そういう結論としての極論なのです。これを読んでいっても、支援をします、援助をします、行動計画を作ります、というのは結果として、例えばどういう良い子、青少年を国は欲しているのかが、一律ではないというのはわかりますけれども、それがわからない。だから、うまく皆さんいろんなご意見があると思うのですが、意見が言い難いのでは。会長、どうなのでしょうか。

会長

保育とか、そういう手段の話がされるので、やはり先生は教育に携わっていらっしゃるから、成果物というのですかね。どういう子どもを私たちは育てるのかという、その結論というか、最終目標のところから、手段を考えていこうという根本的なお話で、多分それができればすごくいいのだろうとは思いますが。価値観が非常に多様化しているし、空洞化しているというのも確か

におっしゃる通りですね。逆に言えば、虐待をしている親にお金をやって自由にさせるのはどうなるんだ、という議論もあるでしょうし。

確かに今、次世代を育成するという面白い用語を使ったなと思っているのですがけれども、つまり日本国民というのは、日本の総人口、労働力という話になると、何か私たちにとっては非常に遠い存在だけれども、私たちが今住んでいる府中市、30年後の次の中堅、次の府中市を支えるような人たちがどういう人であってほしいのか。府中市の何かを引き継いでいってほしいのか。そういった地域の想いというレベルにもう少し下ろしていったら、自分の個々の子どもというだけでなしに、この地域の子どものことを受け継いでいってほしい、ということであればちょっとイメージしやすいのかなと思います。1人1人では家庭によって違うでしょうけれども、例えば地域でこういう人も必要、こういう人になってほしい、こういう人材が次の府中市を支えていってほしい、というレベルで考えてみたらいいのではないのでしょうか。

委員

今日の午前中、ポップコーンに参加して参りました。その中で、今日は0歳児の赤ちゃんを持つお母さんたちの会だったのですが、はじめて参加されたお母さんが、こういったポップコーンのような場所があってよかったです、とおっしゃったんですね。そして雨が降るとなかなか公園にも出られないのですが、屋内でこうやって子どもが遊べる場所、安心していられる場所というのは、他にあるのですかと尋ねられました。さてどこがあるかなと思いましたが、私自身が単に知識がないだけかもしれませんが、文化センターの中に遊戯室のような場所が1つと、あとは学童も含めれば何か所かでポップコーンをしておりますので、日にちを合わせてそちらにいらっしゃることも可能です、とお答えしました。でも、その他に、どこがあるかな、と考えたとき、なかなか私には思い浮かばなかったんですね。文化センターの中の遊戯室も、行っても必ず人がいるわけでもないの、お母さんも赤ちゃんと行っても、しばらくすると寂しくなって帰ってしまう。

はじめての子育てで不安を抱えるお母さんが、雨の日でも晴れの日でも、ここに行ったら誰か、同じくらいのお子さんを連れたいお母さんがいらっしゃる、もしくは話してくれる方がいらっしゃるという場所が、まだ少し足りないと思いました。また、そういう場についての情報が行き渡り、有効に活用されているかなということが心配になります。

実際のところはどのようなのでしょうか。私が知らないだけなのかもしれないのですが、そういうところにもう少しお金を使ったらどうかなと思うのです。今回のアンケートでは、有償で預けるという事に重点をおいて聞いていますけれども、たくさんの手順を踏んで、実際お金を払って預けるというのはずいぶん敷居が高いように思うのです。もう少し、気軽に利用できるような場所の充実を図るのも重要ではないかと思いました。

会長

今のお話ですと、子どもさんの年齢としてはいくつくらいになりますか。

委員

今私がお話したのは、0歳児を抱えたお母さんですけれども。

会長

0、1、2、歳ですか。

委員

そうですね。ポップコーン自体が、0、1、2、3歳まで、幼稚園に入る前の親子を対象にしたひろばですので。

会長

そういうケースですと、やはりお母さんが育児にすごく悩んでいるし、先ほどアドバイスをしてくれる方がいない環境の中で子育てをしていると、もちろん仲間を発見したり、いろんな子育て情報を得たりというのはすごく力づけられるし、あるいは子ども同士が遊んで、孤独な育児ではなくなるという、子どもにとっても親にとってもよい状態になりますよね。自分の人間関係も深まりますし。日本人は1人1人がすばらしい能力を持っていると思うのですよね。学歴も高いですし。それが出会いの機会であるんなことが、仲間を作ることによってできる。人に頼まなくても、自分たちの力を合わせればいろんなことが結構できるのですよね。そういうことを発見して、実践に移していけるとよいですよ。

委員

今のお話に関連してなのですが、この会議に出席するようになってから、暇があるとなるべく公園に行って、お母さんとお子さんがいたら話しかけて、どういうことに困っているのかということを知っていた中に、やはり今おっしゃったように雨の日に遊びに行くところがないとか、遊びに行ったときにグループができてしまっていて入りにくいとか、そういうときに、もしも年齢の違う人がそこにいらしたら、すごくぽっと明るい顔をなされたのですが、行きやすいとおっしゃっていました。別にああしろ、こうしろと言う人ではなくて、ちょっとその中で困ったときに相談できるような人が1人いたら、そこには遊びに行けるという方が3、4人いらっしゃいました。それとか、いろいろ伺ってきたので、今日言わなくちゃと張り切っているのも、また思いついたら言います。

委員

私が経験していることでは、たぶん意識調査が出ればはっきりすると思いますが、年齢、家庭によって、ニーズが多様化していると思います。お母さんによっては、行政でなければ信じられ

ない、資格のある人に相談したいという傾向があるように思います。

私たち民生児童委員は、オープンルームでお手伝いしていますが、民生委員を活用していただければありがたいなという思いから、最初は名乗らずに、ボランティア、近所のおばさん感覚で、嫌われないよう心がけてオープンルームに参加しておりますが、やはり、資格のある方に相談なさるようです。障害児の保育の問題など、家庭内でどうにもならないような事例や、見守りが必要な場合など、オープンルームの先生を通して、相談を受けることがあります。過去にはそういう形が多かったように思います。

いろいろなところにおじゃまして、単なる相談役では、お母さん方は高学歴ですから、なかなか私たちを相談役として認めてくださらない。現に、民生委員なんか相談したくないと言われたこともあります。ですから、民生委員、児童委員もいつも身を律して、皆さんから相談しやすいような委員にならなくては、と努めておりますが、そんなにたやすく隣のおばさんを受け入れてくださらないように感じます。私たちの世代が何とか近隣のたすけあい機能を取り戻そうと思っても、行政に相談に行ったほうがいいという傾向にあるように思います。

会長

議論に介入しすぎてもいけません、委員さんのお話は、子育てをしている仲間という意味での横の連携というような感じがするのですよね。1人1人が孤立している部分で、同じ子育てをしている仲間を発見して、情報交換をするという。

委員

そういう場所の提供をできればということです。

委員

それは確かに必要ですね。私も前回申し上げたと思うのですが、雨の日の居場所がないのです。多少は市内にありますけれど、なかなか近くに、気楽に集える場所がない。それから、図書室も文化センターにあります、私が子育てをしていた頃は、本を選ぶのに子どもがしゃべってもいい雰囲気だったと思います。読み聞かせできる図書室だったのですが、ここ数年行ってみて読書をしている高齢者が多く、子どもがしゃべると冷ややかな目を感じます。子ども同士や孫と本選びができない雰囲気です。これは何度もいろいろな場で、発言しているのですが。

会長

高齢者というのは男性が多いですか、女性が多いですか。

委員

男性も女性も多いです。貸し出しの部屋も、文化センターによって違うのかもしれませんが、大人が2人で行って、子どもを廊下に待たせておいて、「しっ」と声も出せないような雰囲気です。高齢者が読書をしていて、何か声を出すとじろっと見られる。司書の方も結構そんな感じで、私

は息子の連れ合いと2人で行って、1人は廊下で子どもを見ていて「声を出さないで」なんて言って、今はそんなふうになってしまいました。読書室で声を出すのはよくないと思いますが、本を選ぶ所くらいは、どたばた駆け回るのはいけませんけれども、子どもにマナーを教える場でもあると思うので、多少この本がいいとか、こっちの方が面白いとかというのはいいのではないのでしょうか。

会長

今のお話のお子さんというのは、年齢的に言うと。

委員

3、4歳です。

北場会長

さきほどのお話よりちょっと上の、活発になる年齢ですよ。

委員

そうですね。まだ就学前です。

会長

ですから、いわゆる子育ての仲間づくりという部分と、専門的に相談したい部分は、やはり専門家というものが、今の若いお母さんに共通しているところなのかもしれませんね。ただ、横の仲間づくりであれば、あまり資格というのはいらないのですよね。

委員

仲間づくりでしたら、やはり、私も感じておりました。仲間づくりは大切だと。それに、図書室もそういうものに協力してほしいと思います。図書を選定する場で子どもの多少の私語は許していただき、各世代が利用しやすいようにしていただきたいと常々思っていました。ちょっと話がいろいろと飛んでごめんなさい。

委員

ポップコーンという事業では、実際、ボランティアといわれる方は無資格で参加可能です。現在、子育てひろばポップコーンは、学童の場所を利用して展開しているところと、女性センターと総合体育館と新町文化センターという3か所で展開しているものと、2つのパターンがあります。

会長

学童は昼ですか、午前中ですか。

委員

金曜日の午前中です。その場所を利用して活動しております。それで、先ほど他に言いました総合体育館、新町文化センター、女性センターという3か所でやっているポップコーンは、全く学童とは違う、市の施設を利用してありまして、やはり午前中の活動です。学童のほうは学童クラブの先生がヘッドになりまして、そのリーダーとしてやってらっしゃいます。残りの3か所のほうでは、市の保育園の園長先生がヘッドになられています。

会長

それはボランティアみたいなものですか。

委員

いいえ、府中市が先生にリーダーをしていただくようお願いをしてお金を払っています。有資格者は先生のみです。ボランティアとしては、お母様方からこういうときにはどうしたらよいのでしょうか、こういうときにはどこに相談したらよいのでしょうか、というような質問が出たときに、ひとりの母親としての意見は言えるのですが、不安感があります。そういう時には先生に「こういうふうに答えましたけれども、それでよろしかったでしょうか」、ですとか、「こういうときにはお母様にどういうお返事をしたらよいのでしょうか」と聞くわけですね。逆に、それはお母様方にとっても同じだと思のです。何となく信頼をおける方に聞きたい、援助が欲しいというかたちになると思います。資格があるから正しい答えを必ずしも言える訳ではないとわかっていながら、やはり資格を伴った経験がある方の意見につい頼りたくなるのです。ですから難しいなと思います。

委員

聞き合えればいいのですが、そこにいくまでの距離がありますね。

委員

やはりそういった場所で、ボランティアする者としては、いざとなったときに聞ける方がいらっしゃるというのは、心強いです。ですから、資格有無ということとは別に、何か場所を提供するときにはそれを支えるだけの能力がある方が必ず必要で、それを育成することがすごく大事だと思います。そこにお金をかける必要があると思います。

副会長

先生がおっしゃった30年後の府中を支えるという、人材を育成するという観点は、ああそうなんだなと思いながら、この地域の歴史や伝統、風習などがあるのかと思いますけれども、うちのほうの自治会で3年前ぐらいに児童委員会というものを作ったのです。児童委員会というものを作った主たるメンバーというのは、退職したおじさんたちなのですね。退職した人の中には、校長先生がいっぱいいるのです。近所の農家のおやじとか、退職した警察官とか、校長先生とか。

児童委員会は毎週土曜日に小学校の子どもたちくらいを対象にして、誰が来てもいつ来てもいいという感じでやるのですね。結構人が集まっているのですよ。読み聞かせなんかは妙にうまいので、前職を聞いてみると校長先生だったりするのですね。この間、私は行きませんでした。おしるこ大会をやったら、150人くらい集まったようです。場所は地域の公会堂です。全く無給です。全くボランティア。周知徹底は学校と自治会を利用して、という形で、どうもその人たちの話を聞いてみると、昔の職業とといいますか、つい最近まで校長先生だったから、そういう能力が活かせて非常にうれしいと、生き活きとしています。だから、本当に言い方は悪いですけども、高齢者といいますか、退職された方をうまく利用というといけませんけれども、活用というのですか、ご協力をいただくと、結構うまくいくものだなと思っています。3年経ったらすっかり軌道に乗ってしまいました。

ただこのポイントというのは、会員の名簿とか規約がないのです。非常に緩いのです。だから、いつも教えに来る人も、「たぶん来るのではないか」とか「来ないかもしれない」とか、子どもたちも何人集まるかわからないという状況でやっているのです。隣のおじさんが日向ぼっこをしているところに遊びに行った子どもという感じができるのですよね。それが受けているような感じですか。すみません、以上です。

委員

子ども家庭支援センターさんをご出席になっていけば、もっと多分こんなお話があると思うのですが、やはり支援センターもそういうグループを育成して、各地域に乳幼児育児の、親子を対象に、育児不安を解消しようという努力をなさっているのですが、リーダーになる人がなかなかいないということですね。ある程度専門的な資格がないと、先ほど申し上げたように、お母様方も集えないというような雰囲気があると思います。ですからそこに、先ほどおっしゃったように、1人はいつでも相談を受けられるような有資格者を置いて、あとはボランティアで。

会長

少し議論を整理したいのですが、今、副会長がおっしゃったお話は、多分小学生ですね。男子女子、いろいろあるかもしれませんが、かなりしっかりした、どちらかという遊びのお話で、今の委員さんのお話はどちらかというところ、0、1、2歳ですから、子どもの小児保健の話だとか、そういう部分、それからもちろん母親のノイローゼ的な部分もあるかもしれませんが、どちらかというやはり保健師さんとか医療とかなり関わり部分もある。そこはやはり素人だけの判断は怖いという部分もあるのですかね。

委員

そうですね。こちらが答えにくいのは専門的なことです。

委員

それから、今若いお母さんは、家に居たらいらいらするとおっしゃっている方も結構います。

2人の子どもと3人だけで家に居たら、いらいらしてどうしようもないから、やはり働きに行つて、自己実現に向けてやっていきたいという方もいます。

会長

ですから今のお話で、子育て不安で仲間づくりをするということであれば、その部分における専門家は多分要らない。仲間を発見できる場があれば、結構情報も入ってきます。だからその中で、専門的な話も聞きたいというときに、専門家と連絡がつくようなラインやパイプがあればいいですね。多分そこでいろいろと情報交換もされるだろうし、場合によってはご自分で専門家を探して、小児科の先生に行ったりということもあるのかもしれませんが。

委員

どこに問合せをすればよいのかを答えられれば、ボランティアのほうも不安ではないかもしれませんね。自分が答えられなくても、ここにご相談くださいというように。

会長

まことに僭越な話ではありますが、府中市にも保健師さんはいらっしゃるはずですね。そういう保健師さんとのラインがちゃんと取れればいいのですが。

委員

実際自分が子育て中に不安だった事は、わざわざ保健師さんに問い合わせるほどのことかどうか迷うささいな事ばかりでした。何と云うのでしょうか。全く知らない方に、市民として電話なり手紙なりをするというのはやはり敷居が高い。

会長

ポップコーンという1つの行政的な活動をおやりになっているわけでしょう。行政が少し関与している。

委員

ああ、私が各機関に繋げるということですね。ただ実際、何をどこに聞けばよいかという情報を、私は自身持ち合わせていません。他の方はどうかはわかりませんが。

会長

ポップコーンというのは、そういう育児不安を抱えた母親たちの出会いの場としてだけ設定されているから、その中で何か出てきた専門的な相談に対してつなげることを想定していないということですか。

委員

いいえ、主任の先生が必ずいらっしゃるので、今はそれでいいのです。今後もし広場を増やすということになれば、ということです。

会長

そういう意味での人の育成が必要だということですね。

委員

そうです。現時点では問題ありません。しかし、今後は展開してどんどん増えていくようですので、規模が大きくなるにしたがって、そういったところにも視点を置いていく必要があると思います。

委員

また少しずれるかもしれないのですが、私は国際交流サロンというところで8年ほど、外国人に日本語を教えるボランティアをしています。その過程の中で、今ちょうどお話になられたようなことと似たような場面がありまして、ボランティアという言葉と、ボランティアをしようという人の扱い方というのは、似ているかなと思いつつながら先ほどから伺っていたのですが、外国人に日本語を教える場合には、日本語がしゃべれるから我々は誰でもできるよという感覚で、最初はボランティアというのをそういうふうに捉えるのですが、教えるということは、その外国の人が日本で暮らせるような下地を作る言葉ですから、それを段々突き詰めて考えてくると、やはり日本語がしゃべれるから教えられるとか、ボランティアが教えてあげるのだから、日本語をしゃべってあげるのだから、ではとても勤まらないということに至ってくるのですね。

この活動をしていて、段々その問題点が浮かび上がってきて、やはりボランティアの育成が大事で、人に何かをしてあげる、自分が持っているものをしてあげることがボランティア。それからプラスして、ある程度の責任あることが言えるようになるために、やはり外語大の先生に講習会を開いていただいて、教授法を研修するのです。ボランティアするのにまだ自分がお金を払うの、という感じで、自分の研修をまずしなければいけないというところまで今育ってきてつつあって、そうすると、少しずつ骨太になっていくのですね。

私も子どもを3人育てたのですけれども、それは自分と子どもとの関係で、経験からくる子育てということだけであって、知識、学問的背景が常にあった上で、教科書通りにきちんと子育てをしてきたわけではないので、ああいう失敗もしたからあなたはこうしないほうがいいよというような経験的なことしか言えないと思うのです。やはり、自分が自分の子どもに子育てするのは違って、よそのお子さんの相談に乗るとなったら、ボランティアといえども、ある程度の学問的な、知識としての背景が必要ではないかなと。その育成というのは大事なことはないかなと思います。

委員

私たちも勉強しなければなりませんよね。

会長

あの、今、委員さんがおっしゃった、ボランティアでありながら、授業料を払ってまで なんてやらないといけないと思うのですか、逆に言うと。ボランティアをやって外国人に日本語を教えようと気楽にはとてもやれなくなるのですよね。

委員

生まれたときから自然に日本語を話すようになっているので、こういう場合、助詞はこちらを使いますよ、とかいうことはいちいち考えながら覚えてきていないので、外国人にそれを持っていったときに、ある程度系統的なことを言ってあげないと入らないということなのです。

会長

それはわかりました。そこまでやらなければいけなくなるというのは、やはりなりゆきですか。

委員

やはり責任です。受けない人もいます。

会長

責任を果たして委員さんご自身が何か得るものはありますか。

委員

それは、こちら側が教えられるというか、エネルギーをもらうというか、いろんな意味でこちらが自分の生きがいにもなっているということがあります。

委員

それは私もわかります。人生経験が豊かになりますよね。授業料を払ってでも金銭では得られないものがあります。反面教師というか、皆さまから教えていただくことが多いです。生きる上で教えていただくことが多いから、ボランティア民生児童委員も続いていると思います。私の何年かわからない人生の中で、いろいろな方との出会いで、経験が豊かになるということと変ですが、そういうことです。学校では学べないようなことが学べるということとは確かにあります。ボランティアさんも同じだと思います。やはり外国人に教えるには、外国の文化も日本の文化も、自分なりにある程度のものは勉強しないと、やっていけないと思います。ボランティアを続ける方は、自分が育っていったらいいのですよね。

会長

ボランティアというのは、私が多分教師をやって授業料をもらって教える限りにおいては、これを譲り渡したら自分が教師でいられなくなってしまうというのは教えないですよ。でも多分ボランティアで信頼関係ができたなら、そういう自分の大切なものだって教えるかもしれないですよ。

委員

みんなあげてしまいます。その方の気持ちに添ってボランティアをしていますから、その人が立ち直れるように、私もその方の気持ちを肯定して、その方の気持ちに添ってやっていますので、ボランティアというのはそういうものだと思います。

委員

子育ても同じようなものではないかなと思います。経済的なことなど、自分のいろんなことを我慢して子どもを育てますけれども、逆に子どもに育てられたり、子どもからとても大事なものを受けているというものだと思います。

会長

それはご自分のお子さんの子育てだけですか？子育てから得るものというのは。

委員

いいえ、何かを育てるということです。自分の子どもに限らず、何かが育ってくれる、もしくは育っている姿を見るところというのは、経験しないとわからないです。

委員

でもやはり、子育てが終わったら、子育てのエネルギーがボランティアにも活きますね。女性はそういうことが多いと思います。それくらい、子育てというのはぐっと集中しないといけないものですから。それが自分の人生ですから。子育ては、2年後、3年後、10年後を見て育てないと、子どもは絶対に伸びないです。今、そこで20歳の人間としゃべるわけではないのです。だけど、お母さんは何しろすぐそばしか見えませんから、1歳、2歳、3歳と通ってきて、小学校に行ったら少し自分の時間ができて、中学に行ったらまた精神面で子育てにのめり込んで、大学や高校くらいで一応親としての肩の荷というのか、ここまで無事に育ってくれたというときにはじめて、ボランティアのほうに母親っていくと思うのです。それは無償の愛で。それは皆さんがおっしゃるように、外国でもどこの国でも、ある程度の歳になると病院へボランティアに行きますというように、私はボランティアとはそういう解釈しかできないのですが、無償でできます。そういう意味だと思います。私は女性なので、男性になったことがないので男性の方はわかりませんが。

委員

全員がそうとは限りませんが、今は働きに行き家庭の経済が楽になるようなことを選択する場合があります。

委員

また話がまた全然逆方向に行くと思いますが、最初に委員がおっしゃったことは、多少共感を持ちまして、家族愛だとか子どもや育児のすばらしさとか、やはりこの行動計画の基盤はそこにあると思っていますし、地域の中で、先ほど委員がおっしゃったように、ポップコーンでも助けるばかりではなくて子育てはすばらしいのだということを、ボランティアとして伝えていきたいと思っています。この気持ちを忘れずに、今後計画を立てていくのに参加していきたいと思っています。

今までのお話から感じたのは、ここにいらっしゃるほぼ全員が、私は今一応小学生はおりますが、小学生以下の子どもは現在育ててはおりませんので、本当に今育てているお母さんの声を、私がここで言っても、聞いてきた話でしかないわけなのです。ほとんどの方が聞いてきた、ということになるのは、私は非常に何か片手落ちというか、アンケートの結果から現実の声を吸い上げるのですが、やはり本当にポップコーンにいても、ファミリーサポートで小さいお子さんを預かって話をしても、そのときに出た話というのは結構すばらしいですね。本当にこれが困っているということと言うと、本当に困っている人が言うのは非常にやはり響くので、私がそれを代弁する役でここに来ているとは思いますが、それをやはりこの計画の中でなんとか拾い上げる方向性をつけていただきたいということがあります。

それから、先ほど副会長が児童委員とおっしゃったので耳を大きくしたのですが、子どもも小学生の高学年になれば、それなりの意見を言うと思います。中学校、高校生になれば、自分たちがどういうふうに府中市の中で、教育なり居場所なり、環境がどうなっていくのかというのを、提示すればそれなりの意見をきちんと話すと思います。また、子どもにみんなの意見をまとめてもらえば、やはりそれなりの声が上がってくるのではないかなと思っていて、アンケートとかこれを見ると、私たちの立場で物事を進めていくように私には感じられて、主役は子どもなのだから、その部分をもう少し計画に身近なものにしていきたいというのか、いってほしいというのかわかりませんが、だったらこうしたらいいという良いアイデアが自分に今ないのは非常に残念というか、アイデアがないのにこういう意見を述べているのは本当に無責任なのかもしれません、そこら辺のところも捉えて話していきたいと考えます。

委員

私も同じように思って、委員さんのご意見、非常に極端に聞こえますが、私も共感するものです。私が前回の第1回目のときに質問したと思いますが、やはり先ほど副会長さんもおっしゃったが、逆手でいらっしゃいます、国の子育て観が何なのか、それから私はやはり府中市がどういう子育て観を持って、国の政策を市でどう政策化していくかという、どういう子育て観を持っているかによって、これをどういうふうにつけていくかという、それが今までいただいた

資料を一生懸命読んできましたがとても見えてこないのですね。

今日は、会長が、その議論をしやすくするためにということで、3つの資料に照らしながら発言できるように作ってくださったので、皆様のご意見をずっと聞いておりました。やはり皆さん、1人1人については、前回の議事録から、どういう立場の方でどういう想いで関わっておられるかというのを読ませていただきながら、お顔をつなぎながら意見を聞いているのですが、まだまだ皆さんお互いを知らない中で、おっしゃっているポップコーンのことをご存じない方もいらっやっや、なかなか難しい議論だなと思ひながら伺っています。

私は、政策は政策だと思ひています。ほとんど今までの発言は、今関わっているところでの悩みとかご質問とか、いろんなことを思ひ悩んでいるというお話だったと思ひます。そういうことを基盤に、次世代をつくるということと、現代のものと、価値観、考えかたと政策は、やはり合わせるけれども、別に整理しながら議論をしていかないと、大変まとまっていけないと聞いていて思ひます。

やはり私が一番知りたひところは、府中市の子育て支援課が、というか、府中市がどうひ子育て観、人間観を持ってこの政策を作っていこうとしているのか、というところを伺いたひ。だけれども、前回のお答えだと、ぼくたちもなかなかわからないです、というようなおっしゃり方で、ここの意見を尊重しながら計画を作っていくというお答えだったと思ひますが、その辺をやはりきちんと同意した上で政策を作っていかないと、大変難しいのではないかと思ひます。

私は、パーソナルケアサービスみもざというところで、子育て、保育もやっていますし、障害者のお世話もしているし、老人のお世話もしているのですが、皆さんが同じように悩んだことは、本当に共感しています。やるときはとても気楽にやり出したけれども、今7年目になって、やっていくと、素人でやり始めたけれど素人では、人の命を預かたり、これから作っていく人の人生の一部を担っていたりするのだから、適当にはやれないということをしごく実感しているところなんです。そういうときに、やはり例えば研修をしたりしていきながら、自分自身を鍛えながら、地域の一部として担っていこうと思ひのですが、やはりNPO法人はなかなか経済的にも厳しい。そういうときによく行政の方や企業の方に財政とか場所とか人材とかの応援をしてくださひというお話をよくするのですが、そういう政策、制度は人生1人1人の生き方をこうだからこうしなさいというものではなくて、時代は変わってきて、1人の生き方をバックアップしていくのが行政であり政治であるというふうな考え方に変わってきているのでは、と思ひているので、そのところを意見として申し上げておきたい。あとは会長にいろいり整理していただきながら、関わっていきたく思ひていますけれども、市の考え方をとても知りたくひです。

会長

一応、答えはないと思ひますが。

子育て支援課長

市の子育て観と言ひますと、現時点ではないし、持てるものではないと思ひます。要は 個別の政策部分でそれをどう考えるか、例えば保育の部分で待機児がこれだけ発生した場合は、どう考

え、どうやっていくか、そういうものについては明確にお答えできるし、それを例えば市長が選ばれる中でそういうものを公約に掲げていくと、システムとしてはそういうふうになり立っていると思います。ただ、議論されているように、子育て観、どういう子どもになって欲しいというのは、行政でそういうものをできるのかどうか分かりませんが、今回出ている新しい次世代育成行動計画、こういう中で府中市の計画上の理念として、こういうものを求めていくというのは、今回出来上がってくるのだとは思いますが、既存計画の中では、子育て観というというものに答えられるようなものは持ってありません。

会長

時間も押し迫っていますが、確かに、非常に難しい部分もあると思いますが、例えば、1つは子どもの可能性を阻害しないように、子どもの持っている可能性をできるだけのびのびと育てるような環境を与えてあげる。その中で子どもがどう育つかというのは、ある意味、子どもが自分の人生を選択していくわけですから、親や行政が強制する話ではない。でも、子どもが本来持っている才能をできるだけ阻害しないで、いきいきと伸ばしていけるような環境、逆に言えば、私がこんなことを言うと怒られてしまうかもしれませんが、親もある程度子どもが大きくなったら手を出すなど。いい学校に行きなさいとか、となると、教育費もかかるし、子どもがその目標に達しないと親もがっかりしてしまうし、子どももいろいろとめげてしまう。だから、子どもの自由な能力を伸ばすということにむしろ親や周りの行政がやるべきだという議論が1つ。

もう1つは、副会長が先ほどおっしゃったように、地域の文化・伝統みたいなものを、やはり引き継いでいって欲しい。もちろん、今、人口の移動が非常に激しいですから、今住んでいる人が、将来ずっと府中市民でいるかどうかはわからないけれども、府中市が地域の特性として持っているような文化や伝統みたいなものを、次の世代にも伝えていって欲しいという最低限、社会としての期待みたいなもの。そのあたりの折り合いが必要ですね。もちろん、1人1人の親の気持ちや子どもの気持ちはまた別にあるかもしれませんが、それに対する干渉はできない。とりあえずそんな方向ではいかがでしょうか。

副会長

頭が整理できなくて頓珍漢なことばかり言ってすみません。皆さんのお話を伺っていて、自分の抱えている違和感というのは何だろうとずっと思っていたのですが、どなたも、たとえば委員さんはPTA会長をなさっていたり、子どもとか小さい子でも大きい子でも関わりを持ってなさってきた方々で、協力的で一生懸命なさっている方が多いのですけれども、例えば委員さんがおっしゃるような雨の日にちょっと行って相談できるような場所が欲しいというお母さん方というのは、実はコミュニティ的なおつきあいをあまりしたくないな、とそういう人もいるという意味ですよ。あまりそういうことをしたくないけれども、子育てと自分のためには得をしたいとか、情報が欲しいという方々が多いかもしれない。それで、自分の都合で子育てをなさっていたり、ある種の地域で非協力的な方々と私たちは言っていることが違うのですね。私たちは基本的には協力的だし、他の人たちにも手助けをするし、という人間たちがそういう話をしているのですが、

一言で非協力的というか、あまりおつきあいはしたくないけれども子育ての智恵は欲しいという、そういう人たちをどうやったら、私たちのような人間というのですか、周りの人を手助けしながら、自分も助けていただいたのだから、今度は他の人のお役に立てるようになるとういうような、委員さんのようなお考えを持った方々に、どういうふうに、こっちを向いて、とさせられるか、ということなのかなと。それを違和感という言い方をしたのですが。

委員

そこが難しいですね。

副会長

いくらサービスをして、サンキューと言って、さようならと言って、私はもうこれで時代はおしまい。サンキューと言われると、繋がらないで、サービスばかり増大していくという感じなのですよね。だから、どうやったらこっちに向いてくれるのかなというのをずっと聞きながら思っていたのですが。

会長

つまり、サービスを受けるだけではなく、サービスの提供者に回るという相互関係ですね。輪に入っていていただくという。

委員

本当に欲しいサービスを受けた方というのは、次に活かせるのではないのでしょうか。例えば関わって欲しくないときにはそっとしておいてくれる、聞きたいことがあるときには答えてくれる。勝手ですけど、今は必要ないと思っているときには近寄ってこない、でも聞きたいときには近寄ってきてくれるようなサービスを受けた人というのは、同じように、何か次の人にしてあげられるかもしれないと思うのです。望んだとおりにサービスを受けた人は、それなりに充足して、違う場所で、次の世代に何かを繋げていくのではないのでしょうか。

委員

サービスとは何ですか。

委員

サービスという言葉は、皆さんがサービスとおっしゃっていたので使ってしまったのですが、「自分がして欲しいと思ったことをしてもらおうこと」でしょうか。

委員

主語は行政ですか。

委員

いいえ、それが行政であるか否かに関わりません。例えば子どもだったら、親に本当にして欲しいことをして欲しい時にしてもらったことがあれば、次に自分が親になったときにもしてあげられる。行政と市民も同じではないかなと。ポップコーンに参加していても、人と繋がりがたくない方や、コミュニケーションはしたくないけれどどこか居場所がないから来たという方もいらっしゃると思うのですね。そういう方たちもほっとしていただける場所でありたいというのが、ポップコーンの趣旨です。ひろばとしては、いろんなニーズを持ったお母さんたちがいらっちゃって、それぞれにどういうふうに応えていくかというのが難しいと思うのですが。

会長

人の長い一生を考えてみたときに、やはり子育てで悩んでいるときの何年かの時代というのは、サービスの受け手でいいのではないかと。自分がやりながら受けるという立場ではなくて、その時代はやはりいろんな人のサービスを受ける。それで、確かに受けたサービスがすごく感謝してありがたいと思えば、それをまた他の人に提供しようという互酬的な感情が出てくるし、その人の資質によるかもしれませんが、人間関係のうまい輪の中にすっぽりと入ると、取り込まれるかもしれないし、その輪がうまくかからなければ、サービスを利用しても、はいさようなら、という方も出てくるかもしれない。それは多分、もう1つ、サービスを受ける、受けないだけではない、人間関係を結ぶ絆みたいなものがあるのかもしれませんね。多分、サービスを受けるだけでなく、その人とすごく気が合ったとか趣味が合ったとか。そういう形でまた人間関係ができてくると、仲間ができてきて、こんどはじゃあ自分たちで何かしてあげようということになるのかもしれませんね。

今のお話は、かなりボランティアの本質的なところをいろいろと突いていると思いますし、先ほどボランティアは無償だとおっしゃったけれども、1人1人のボランティアはもしかしたら無償的なことを引きずるかもしれないけれど、NPOのように具体的な事業をしようとするとお金というのは絶対に必要なのですよね。もちろん、中にはボランティアで、無償でサービスを提供してくださる方がいるとしても、事務所を借りるとか、物を購入するとかは現実に必要なもので、NPOというのはいわゆる非営利組織で金儲けではない。でもお金は必要です。その中でボランティアが無償でサービスを提供していただく方は大歓迎だけれども、という組織のあり方だと思うのですね。

今、逆に言えば、コミュニティビジネスという考え方がありまして、営利企業でもいいよと。例えば、商店街が寂れて、物が買えなくなる、八百屋さんがもうつぶれてしまう。近くの八百屋さんがつぶれてしまうと困るから、何とか続けて欲しい。そうすると、八百屋さんという営利企業も、その地域社会の人にとってはすごく大切なサービスなのですよね。だから、営利だから駄目、非営利だからいいという、そういう単純な話でもない。やはり、儲からなくて、企業が提供しない、行政もなかなか手が回らないサービスを、地域の自分たちで立ち上げていくという、そういうボランティアなものというのは、かなり根っこは同根だという気がするのですね。多分それは、個人のレベルから組織のレベル、そしてあるいはもっと大きな地域レベルの話までいろいろ

ろあると思いますけれども。

委員

まだ府中はなかなかそこまで行っていないように私は思っているのですが、教育関係の審議会や教育会でも言わせて頂いていますが、一言でいえば行政依存ですよね。先ほどの副会長のお話やサービスというお話も、私はそういうふう聞いていたのですが、結局持っていく話の最後が、じゃあ市役所がやってくれよというところに、こういう委員会でも往々にしていってしまう。行政依存というか、だれがやってくれるの、税金をこちに回してよという、そこに必ず行き着いてしまうので、先ほどのようなボランティアな関係とか自立したコミュニティが育たないという気が常にしておりますが。

会長

前回発言をされていた委員さんは、今日のご発言がないのですが。

委員

地域福祉の推進委員会のほうから引きずって細かいところ出ている部分もあって、府中市がせっかくこのように福祉を考えてきたものが、この中で基本的な土台となって話されていないという思いはすごくあります。ここでも基本理念と基本視点は市民の方が手にとるような形で冊子としてできているわけですし、子育て支援課さんからもこの基本理念が語られなかったのはすごく残念です。私自身はこういう土台の上でこの委員会に出させていただいているという部分もあって、ぜひこれは皆さんのお手元に一部ずつ置いていただきたい と思います。せっかくこのように読みやすい形になっているので。これだって市民参加で、市民公募で私なんかが入ってやってきた計画ですし、やはりそれとこの委員会は別であってはいけないと思うし、何かぶつ切りなのですね。繋がっていかない。ぜひ、今日からさっそくこれを市役所の中に何部かあると思いますので皆様に持って帰っていただきたい と思います。

やはり、委員さんがおっしゃる一語一句を、私も考える点はあつたりするわけですが、前向きに何をしたいかというところで、実際には、私なんかはここでいろいろな事業をやって、お金にならなくても、その方に必要な時間、2時間でも3時間でも割いてお話を聞くような部分、それだけで終わるようなことも多々あります。人材育成という言葉1つ挙げられていますが、やはりそういうところをバックアップしてもらえるのであれば、それに越したことはないですし、やはり市民の資質の向上をどうしていかれたらよいのかと思うところです。私たちも今度フォーラムを開催するにあたって、困っていたら、何か手助けをすることがあったら教えてください、という関係を作りたいねというような、今、最後のほうに飛び交った内容かと思いますが、そういう口に出して言える方が少ないと。困った本人というのは、助けてくださいとも言えないと。その際に、ちょっと声をかけてくれれば、言えるというのですね。携帯電話を使えないのですけれど、それを使ってここに連絡してくれますか、という言葉も発することができるということがあって、あなたが今お困りのことは何ですか、もし手助けできることがあったら教えてください

という、そういう言葉を発する部分がなかなかできない。ただ、自分は何をしたらいいかわからない人が大勢いる。何ができるかなと自分も困惑している。自分がやれることはやれるのだからという、その一歩踏み出した言葉とか行動というところを、じゃあどうやって作っていったらいいのかなという、そういうところの積み重ねが地域を良くしていくと思います。今日はそれしか言えませんが。

会長

地域計画ですか、その基本理念というかエッセンスみたいなところを説明していただくと。

委員

そうですね。基本理念というのは基本姿勢ということで、やはり個人の尊厳、自立した日常生活を重視して、心触れ合う、緑豊かな住みよい街づくりを作ってやっていきたいということで、福祉、今までから少し視点を変えて、みんなが作る、みんなのための福祉だと。自分たちが自ら作って、手助けができる街づくりをしていこうということです。視点としては4つありまして、利用者本位の福祉サービスの実現、生涯にわたって自立を支える福祉の実現、地域で支える福祉の実現、4が市民参加による幅広い福祉の実現、という4つが挙げられています。内容としては、みんなで作っていこうということです。

会長

委員さんのほうから、行政依存ではなくて、自分たちが作っていく、まさに行政の政策を活用して市民が自立していくような、市民が主導で自立していくのだという、そういうニュアンスだということですね。まさに市民が主役。だけれども、その主役である市民がどこにいるのだという、いるようでいない。なかなか連携というか、お互いに協力するような関係がなかなかできないという苛立ち、どうやって仲間づくりをしていくかということですね。最後にいろいろとあるとは思いますが、発言されていない方に私のほうから。委員さん、社協のお立場でふれあいのある街づくりに携わられていらっしゃると思いますが、今の論点の中ではどういう意見がございませうか。

委員

今日ずっと聞いておりました、一つ流れとしてありましたのが、子育て観ということです。子どもが地域に生まれて、子どもから高齢者、PTAなど様々な関係者にお集まりいただき、万人規模の地域を選定し、2か月に1回くらい小規模懇談会を開催していますが、子育ての問題は非常に難しいですね。やはり個々によって子育て観が違いますので一つに絞りきれない。ニーズがたくさんあって、この電車に乗りましょうと言っても、嫌です、と言うひともいるのが実態なのかなと思います。ただ、その中であえて共通する問題として、一番大きくクローズアップされることに環境があります。例えば、近くにコンビニができたとする、今までは溜まり場というのがなかったのに、小学生や中学生が夜遅くまでたむろしてしまう。といった事例が報告され、

問題となることがあります。

一方、先ほど副会長からお話がありましたが、白糸台に古くから伝わる昔話を子どもたちに聞かせるということが始まっています。最近では、おしるこ大会やもちつき大会など、様々な活動が自治会内の児童委員会により展開されています。おしるこ大会では、150名以上の方が参加され、地域の学校の先生方も参加されたと聞いています。私がここで言いたいのは、子どもたちのことを考えるのに家庭環境や地域環境など、環境が子どもたちに影響を与えるので、環境を大切にして、取り巻く環境に課題があればその部分を解決していく、そういう仕掛けを作り上げていくということだと思います。

確かに北川さんがおっしゃるように、この話を地域に投げかけて、「自分たちのことだから、自分たちの問題は自分たちでやりましょう」と言っても、結果的には「それは行政がやるべきことではないか」というふうになってしまうこともあります。

ただ、これからは、「自分たちが参加してやりましょう。」という声かけのなかで、時間はかかってはいますが、地域の中にリーダー（世話人）が出てきています。その方々を中心に自分たちで何ができるのか検討する会も動き出していますので、社協の立場としては、あきらめずにしつこく住民の方々の参加と一緒に考えていきたいと思っています。

会長

委員さんは、今日は何か。

委員

少し理論的なお話でもしようかなと思って考えていたのですが、皆さんのお話を聞いていて、私ども保育園も、子どもに寄り添って1人1人の家庭と地域ということを考えているので、様々な事を思い出してしまうのですよね。あまりいい例とはならないとは思いますが、あまり個別的な話になるといけないけれども、11時にお帰りになるご主人がいらっしゃる家庭があるのですよね。

会長

夜のですか。

委員

夜です。23時ということになります。11時にお帰りになって、子どもと遊ぶのをすごく楽しみにされている親御さんがいらっしゃるのですよね。私どもとしては、一児の生活というものを、例えば8時間寝て8時間過ぎて、8時間遊ぶという規則正しい生活をどうしても子どもたちにやって欲しいと思うのですが、そのお父さんを見てしまうと一言も言えない。子どものためを考えたなら、ためというのはまた言い方が難しいのですけれども、お父さんの思いというのがこちらに伝わってくる。そうなるとうちに子育ての支援というのはなんだろうな、という気持ちになります。子どもが朝起きて健全に過ごすことだけが子どもの支援ではないのだろうな、というのを感じます。皆さんのお話を聞いていて、本当に1人1人の子どもを思い出してしまうので、もうひとつ、家

庭とか地域という、そういう単位で物事を考えていかないと難しいのだろうなという気がしています。

会長

理論的という言葉が出ましたが、府中の現実に目を落とした場合に、特に子育てをするような若い世代というのがどういうところに今住んでいらして、どの地域からいつごろ府中に来られたのかということを考えると、やはり地域開発の問題と非常に密接に関わるわけですね。

子育て期間というのは、例えば0歳から小学校に上がるまでというのは、たかだか5年ですから、5年経ってしまうともう大部分の親は忘れてしまうし、その間にいろんな援助を受けたことも忘れてしまって、次の課題にどんどん行ってしまいます。つまり高齢者の問題は、将来自分になるということで意識があるのですが、子育て問題はそれが過ぎてしまうと、応援団でなくなってしまって、逆に私はこれだけやったのにあなたは何よ、今の若い人は何もできないとかというような批判に回る部分があって、子育てというのはみんなが共通に課題を持っているのに、なかなか応援団が出てこないのですよね。つまり、みんながそれを支援しようということが出てこない。

でも逆に言えば、地域に住むということになってくると、昔のように自治会などの地縁が非常に少なくなってきていて、自分で仲間づくりをしなければならぬ。でもなかなか自分でやるのは大変だというときに、やはりいろんな人とごく自然に行き合えるようなポイントに何かそういう場がうまくできると、遊んで顔をあわせ、挨拶を交わす場所とポジションと、それとリーダーというか世話人というか、あるいは何かのきっかけですね。このままではうちの子どもや子ども全体が危ないから何とかしなければという、そういうきっかけが1つあって、連帯が生まれると。そういう意味では、最初からあるものではなくて、それぞれの地域でそれぞれの親御さんたちが、歴史を踏んでいくように作っていくものだろうと。あるいはまたつぶれていくものかもしれません。コミュニティというのはそんなものなのだろうと思います。だからなかなか理論化できない。私も理論化したいのだけれども理論化できない。本当にその地域に住む人びとの営みの中から自然発生的に生まれ、変わり、あるいは消滅していく。昔のように、地縁というようにその地に生まれたら伝統的にやらされるというのがなくなってきていて、自分で作らなければならぬ、作る楽しみもあるけれども、またつぶれていくということもあって、それを少し固定化しようとするのがNPOのような組織で、組織の中でも構成メンバーが変われば、また変わっていくし、それが地域社会というか人間の社会生活なのだと思ってくると、そういう出会いの場とか関係性を作りやすい環境を作ることではできると。その中で具体的にうまくいくか失敗するか、あるいは、いつ何年後にできるかというのはわからないけれども、そういう場を作っていくということを、意識的に働きかけ、支援することは行政でもできるだろうし、志を持った方はたくさんいらっしゃると思うのですけれども。

委員

私は公募でここに出させていただいているのですが、そのときに作文書いたことですが、広報

を見ていたらいろんな講座が出ていまして、本読みの講座もありましたし、いろんな講座がそれぞれにあるので、この講座を終わった人がどのようにその後それを活かされるのかなど。この講座を終わった人は、子育て支援の場で本読みの講座を受けたら、それがじかに活かせるのではと思いました。第三者的な机上の考えかもしれませんが、行政のほうでいろんな講座を広報に載せておられるので、その講座と活動をつなぐということを市の方でやっていただければいいなというようにことを作文では書いたのですね。それを行政でできるところからやっていただきたいなという気持ちがあるのですが。

会長

それは情報という感じですか。

委員

広報を見て私を感じたことで、今、実際に行われている講座が、この子育て支援というタイトルに、もっと結びついていく部分があるのではないかと思うのです。

会長

例えばポップコーンみたいなところで、講座の受講が終わった人たちに読み聞かせの講師みたいなことをしていただいて繋げていくということですか。

委員

そうです。この講座が終わった方は子育て支援のほうで協力していただきたいというようなことが書かれてもいいことだし、それが市の姿勢として反映して書けないものかなと思いました。これは質問というか疑問というか。

会長

行政がやるとなると、またプライバシーとか何とかいうことになって、どうして私のそんなことを、ということになるかもしれないのですが、民間がおやりになるのは全然構わないのですよね。行政が絡まると、逆に言えばわずらわしい、個人情報みたいな話になってしまうかもしれません。本当は、いろんな意味で行政が支援するけれども民間が主体となれば、何でもできる。それも1つのつながりをつくるきっかけですよ。

委員

いろいろいただいた資料を読んでいると、だいたいNPOの活用とか、何とかの活用とか、そういうことが割にまだまだ当たり前の感覚ですよ。国とか行政では。府中市は、私も他の委員会でも言いますが、割と新しい時代の新しい感覚を、ということで研修をしたりして変わろうとする努力が見えていると思います。だけど、まだまだ全体としてはこの文書を見る限りは、上の都とか国とかは、何しろ活用、活用で、特にNPOなんかは本当に委員さんも言っていたよ

うに、私たちはやればやるだけ時間はものすごく提供して、体も疲労してお金も疲弊するという場面がたくさんあります。しかし結果としては、老人介護などでいくと、介護保険の事業者がいますが、そこよりも胸を張っていい仕事をしていると言えます。

それから、保育の場合も、専門の幼稚園の先生方、保育園の先生方などたくさんいらっしゃいますが、1人1人のニーズって違うわけだから、そのときのその人のニーズに合った、その人本意のサービスをやはり提供してきて、またできるのがNPOなのですが、行政はやはり税金でやっているの、ある程度押並べても政策だし、企業もやはり利潤を追求しなければいけないので、できない場合は明らかに平然と断っている場面も知っていますが、そういうそれぞれの持ち場があって、会長が書いてくださった図面のように、子育て関係者のいろんな施設がある。そこがそれなりのことをやっていて、自治体で言えば、私が先ほどくどく子育て観は何かと聞きました、そんなものが明らかにこうですと言えるようなものがないことは私も承知しております。

でも、会長がさっきおっしゃってくださった、子どもの可能性を束縛しない環境を作るという、そういう大きな共通観念をきちんと持った視点でもって作った政策であるべきです。そして、限らないサービスではなくて、ある程度のサービスをして、私たち国民、市民、個人は、いい出会いのところをチョイスしていけばいいわけです。それから、先ほど副会長さんかどなたかがおっしゃいましたが、要求だけするのではなくお返しを、という点ですが、お返しをできる状況にならぬ人たちはたくさんいるのです。でもいつかきつ戻ってくるというように人を信じてやっていくことが、これからの時代には大事なのではないかなと私は思っています。私のみもざは、そこを大事にやっているつもりです。いろんな考え方あって当然だと思うのです。だから、チョイスしやすい、自分の生き方に共感できる市政であってほしい、国の政治であってほしい、制度であってほしいと願うのは、1人1人の望みだと思うので、そこに限りなく近いところを目指していただくということ。それを、政策の共同委員の一員としてきちんと意見を言っていきたいと、いつも思っています。

会長

やはり地域とかコミュニティというところにボランティアという人との繋がりが、他の家庭や子どもに 他人がどう関わっていくのかという、コミュニティのところに議論が集中して、多分そこがメンバーの方々もいろいろと関わっていらっしゃる部分もあるし、問題意識も相当おありなのだろうと思います。

府中市でこれだけ伝統があって、かなり都市化しているけれども、都市部の中ではまだ比較的、人間関係が残っているようなところでも、ものすごく侵食されているし、もちろん区部であればなおのことです。ただ、その中で1人1人がものすごく能力を持っていたりしながら、原始的な人との関わりが取りにくくなっていたり、抵抗感があったりして、人工的な社会の中でしか生きられないような教育を受けてきたから、自然に他の人間と関わることを構えてしまうということなのかもしれません。

時間が来てしまったので、次をどういうふうにとまとめるかを決めなければいけません。何か発言がございませうか。言い残したことなど。

委員

今、夏休みに中学生・高校生を対象に夏のボランティア体験学習を開催しています。300名前後の中学生・高校生が参加されるのですが、少子化ということの中で、1人っ子もかなり増えています。市内の保育園にボランティア活動に入るのですが、子どもたちと話せなかったり、遊べない中学生・高校生が増えてきているのかなと思います。昔はそういうことはなかったのですが、それだけ今の環境が厳しい状況にあるのでしょうか。

会長

最後に私のほうからですが、福祉系の大学で教えているのですが、その子自身が福祉が必要な子もいるのです。自分がなかなか人と話ができないから、福祉サービスを提供する人間に回るのでなくて、自分がサービスが欲しいから勉強したいという学生も結構います。でも高校時代にかなり成績がいいとか、すごくいい子だとか、やはり家族の中での育ち方、育てられ方で結果的に人間関係が取り結べないという状況が、4大に進む学生ですらそういう状況で、そういう子どもたちが家庭の中でどんどん再生産されていると思います。

子育てというのは家の中だけで完結すると思うのが間違いで、やはり社会性というのを身につけるためにはいろんな人と繋がらなければならない、嫌でも関係性を作っていかなければならない。子どもの社会がなくなってしまって、学校に行っても結局は勉強をするための場で、子どもが自由に遊べない環境があるのだなと思います。先ほどの白糸台のお話で、例えば私たちが子どもの時代には、まさに団塊の世代ですので、子どもの世界というのがあって、大人の世界とは違う子どもの世界があったのですよね。その中でいろいろと喧嘩やげがもするし、という環境がなくなってきてしまっているということなので、かなり意図的に作っていかないと、環境が作れない。極端な話、公園があったとしても、そこで焚き火なんかできないですよね。ボールを投げたりバットも触れないです。そうすると、小学校くらいで体力をもてあました子というのは遊び場がないのですよね。ちょっと冒険をすれば、危ないとか危険とかでナイフも取り上げられれば、何にもできなくなってしまいます。そういう人工的な環境で育ってきた子どもが問題になるのではないかなと思います。

しかし、そう簡単に直せる問題ではないです。親は小学校くらいまでは自由に遊んでもいいかもしれないが、中学・高校だとやはり尻をたたいて勉強しろと。勉強する子がいい子だという発想にどうしても凝り固まってしまう。

ただ、やはりいろんな人間関係を作る場、そういう環境づくりないし場づくりをして、1割でも2割でも3割でもそういう環境の中に子どもが育つような場を作っていくというように、市民が手作りでできることではないかと思います。

家庭の中に入るわけにもいかないし、行政に要求するにしても行政ができることとできないことがあるし、できないものをそれでいいかというわけにもいかないの、やはり地域に住む人間が次の世代の子どもを育てるためにできることをやっていくということですよ。

一応、時間がオーバーしてしまいましたので、もしご発言があれば言っていただければと思いますが、次回は、アンケートのクロス集計はまだとてもできないと思いますので、概要をお示し

することになります。それから、委員さんが先ほどお話になったように、今までの地域計画なり、府中市の今までの計画みたいなものを、もう少し行動計画と関係ができるように、ということが今までの計画で言われてきたのかというところの資料を作っていただきたいと思っています。その説明を1時間ほどいただいて、その後の進め方のご相談ですが、1つ1つのもう少し踏み込んだ議論をするのか、それを2時間あまりでやるのがいいのか、分けていくのか、それとも実際に体験をしている人の声をどういうふうに反映させるのか。例えば私の勝手な空想なのでできるかどうかはわかりませんが、ポップコーンなどでやってらっしゃる方が委員の代表みたいなかたちになって、そこで声を集約していただいて、1人1人の声を聞くわけにはいかないけれども、できるだけその声を協議会に伝えていただくとかたちでやってもらうか。あるいは何人かの委員が現地に出かけて行って声を集めるといったように、委員会とは別のかたちでやるとなれば、同時並行的にいろんなことができるし、その声をここでまた報告いただくというようなこともできます。あるいは分科会みたいなかたちで分けて3つ4つの分科会を作って、全体の会とは別のかたちであるいはできるかもしれません。行政のほうもいちいちフォローアップも難しいと思いますが、もう少し詳細なアンケート結果が出てから、次回ご議論していただければと思います。進め方も含めて何かご意見はありますか。

委員

今、市では、子育てたまたま箱に示されている通りいろいろな事業を行っていますが、現実に自分に引き寄せて、この中で使いにくいものなど、若いお母さん方の意見も一生懸命聞いて、せっかくこういう場があるので、こういうものをどういうふうに展開していくかというように、身に引き寄せて考えるほうが、理念とか漠然としたことよりもいいと思うのですが、いかがでしょうか。

会長

具体的にどうすればよろしいのでしょうか。

弓委員

例えば子育て広場のようなようなものは、もう少しどういうふうにしたら使いやすいのか、居場所の問題もどういうふうにすればいいのか、中高生の問題にしてもどういうふうにしたらいいのか、そういう今展開されていることについて、具体的に意見を言って話し合えばいいのでは。例えば、就学前の医療費の補助の問題にしても、所得制限をなくしてほしいという声もありますし、それは私が民生児童委員ですから、若い世帯からいろいろと生活が苦しいという意見も聞いていますので。所得制限がついていますので、住居の問題なども、高齢者より若い世代のほうが住居費の負担が多く生活が苦しいという声が多いです。就学前の医療費を援助してほしいという方はたくさんいらっしゃいますので、こと柄を1つ1つに絞って、大まかでも結構ですが、検討していただければと思います。若い人の意見も聞いていますので。漠然と、それを発言していかどうかわからなくなるのですよね。

この会の趣旨としては、親も子も社会も子育てしやすい環境をどのように作っていくかということだと思しますので。

会長

例えばこの会で、医療費の所得制限を撤廃すべきだという点に賛成か反対かという、そういう議論をしようということですか。

委員

そういうのは、提言としてどうなのかということですが。

会長

この協議会で議論して結論を出そうと。

委員

そこまでおっしゃられちゃうと私も困ってしまうのですが。

会長

要望を出すのは構わないのですが。

委員

子育て世帯の多くの方はそうおっしゃるのです。住宅を借りるのに15万円払っている方もいますし、都営住宅は既得権でほとんど高齢者の方が多いですから、なかなか申し込んでも入れない。それから、住宅を買うにしてもローンが10何万とあって、子どもを産んでまでという方もいらっしゃるわけですね。ですから、やはり子育てをしやすいような・・・。

会長

それはわかります。お金がいくらでもあれば、それはそれでいいのですが、おそらく保障の話をここでしてもどうかと思いますが。

委員

それは抜くなら抜くで。

会長

もちろん、アンケートの自由記述の中で、そういう声が高ければ考えていく必要はありますが。

委員

例えば居場所の問題でも、中高生の居場所をどうするかとか、乳幼児の居場所をどうするかと

のように絞り込んでやっていただけたらありがたいと思います。

会長

いずれにしてももう少し具体的な議論をしようということですね。

委員

理念とか理想ですとなかなか近づけないと思います。せっかくこんないい事業を市は展開してくださっているわけですから。

会長

例えば今回ニーズ調査をしますので、量的な報告しなければならない部分と、当然こういうものが欲しいとか、こういうものを利用したいとかというニーズがでてきますよね。その中で全般的にやるのか、このテーマとこのテーマに絞り込んでやるのか、テーマがたくさんあるとするならば分かれてやるのか。それは次回のテーマを見てからということでは遅いでしょうか。

委員

それは会長さんと副会長さんのほうでお考えいただいて、前回と今日と、少し漠然としてしまいましたので。

会長

いずれにしても行動計画の7項目、これは計画を作らないといけません、非常に範囲の広い話なので、この地域の中で、府中市にとってはこれが重要という重点事項を絞って、これについてはこうしたらいい、ああしたらいいということをお話し合わなければなりませんね。もちろん最終的に作るのは行政ですから、私たちが議論をして、これはこういう問題があるとか、こういう考え方や意見があるとかという点の整理をして、1本でまとまれば1つで書けると思いますし、いくつかのご意見が分かれば、いくつかのかたちで出すことになりますし。最終的にすべきであるというようなご意見が出れば、それはそれで結構だとは思いますが、具体的な施策を行政に迫るということよりは、むしろ行政にいろんな要望を伝えてこういう方向があるのではないかと議論をする場ではないでしょうか。

委員

例えば1番の地域における子育て支援とありますよね。支援サービスの充実とただ書いてありますが、それにはどうしたらいいのか、いろいろな機関もありますから、どういうふうに横のつながりを持っていくか。今、みんな縦割りで、児童委員などもみんな学校に関わっているのですが、それをどういうふうにつなげていくとか、わが身に引き寄せて考えていけば、いいご意見が出るのではないのでしょうか。

会長

例示で医療費のお話が出たので、医療費の話だとお金に関わることなので、うちがここで言っても、なかなか計画として実現するかどうか分からないものですから。

委員

1つの例として、子育て家庭の声が頭に浮かんできたので申し上げたのですが、医療費の問題や生活環境の整備、つまり4番とかいうところでまた出てくるかとは思いますが。

会長

地図を用意していただいたのは、やはり府中市の行動計画ですので、別に全国のモデル版を作るわけではありませんから、府中市の現実の課題が何であって、それを解決するためにはどういう方向が考えられるのか、あるいは意見が一致すれば、こうしたらいいだろうという提言することもできると思いますので、いずれにしても府中市の今の現実問題と今後10年間の課題をどうするか、ということだと思います。できるだけ具体的な提言ができれば、それに越したことはないですね。

委員

働き方とかいうのはやはり国でやっていただく問題だと思いますが、ここにはやはり職業生活と家庭生活の両立の推進と書いてありますから、こういうことも1つ1つ話し合わないといけないですね。

北場会長

逆に言えば、これはちょっとこのメンバーでは話せないことが出てくれば、優先順位を落として絞り込むということが必要かもしれませんね。これから週1回、週2回ずつ集まりましょうということであればいろいろ出てくるとは思いますが。

委員

そこまで行ってしまうと、企業内保育みたいな問題にも発展していってしまうと思うのですね。

北場会長

仮にここで言ってもなかなか力にはなりませんからね。

小熊委員

すみません。1から7と書いてある、これについての意見や要望を聞いてきて、言うというふうなふうに考えてよいのでしょうか。

会長

それはおやりいただいて一向に構いませんが。

委員

どういうふうにして動いていくのかわからないので。ただここに出席して漠然と意見を言うのかなと思ったからです。

会長

皆さんは、何とかよくしていこうということで、現場の声をできるだけ反映させたいということだと思いますので、それはやっていただいていると思います。ただ、現実的な時間の制約がありますので、どこまでできるのか、あるいはたくさんやらないといけないとなると、市のほうでもやり方を変えていかなければならないし、2か月に1回くらいでこういうかたちで集まるとなると、かなり限定されますから、多分かなり要約をした形で1つ1つの生の声をぶつけられてもしょうがありませんから、こういう声に集約される課題を解決するためにはこういう方法があるのではないかと、という方向で提案をしていかないと議論がまとまらないと思います。しかし、最初からこれはやります、やらないということはありません。ただ1つ論点を絞る意味で、次回のアンケート調査結果が出てくれば、その中で特に声の大きいものから優先順位をつけてやっていくということだと思いますし、声が小さくても大事だということであれば、やり方を少し変えた形ででもできるでしょう。

委員

私たちにわかりやすいようにご提示くだされば、一生懸命そのことについて調べてきます。

会長

例えば府中市さんのほうでのアンケート調査をご覧になって、第1回目は多少説明になったとしても、2回目からはその議論を踏まえて、素材のたたき台を出すというかたちでもよろしいでしょうか。その前に議論をしてとか、その辺りも次回のやり方ですけど、どの程度課題が出てくるかということで、多分いろんなものがたくさん出てくると思います。

委員

そうですね、いろんな問題がありますよね。

会長

膨大で処理しきれないほどあると思います。

委員

今は虐待とか非行をなくすということを東京都も真剣に考えていまして、大変強烈な研修をこの前受けてきましたので、そういうものも発言していきたいです。

会長

本当に、虐待のことを考えると、家族って何だという、家族というのはほっておいても自然に立派なものができるというものではなしに、ほっておいたらぐちゃぐちゃになるという、子どもを育てる環境としては最悪な場になることだってあるわけですね。それに現実、他人がどう関わっていくかというのはとても難しい話ですね。とてもではないが、1、2回の議論ではどうしようもない。でもそういうものも含めて、100%ではなくても、極端な話1%でも2%改善するためにはどうしたらいいかということで、少しはお役に立てると思います。

副会長

会長、今日はぼやとした議論だとおっしゃるのですが、最後のほうでは見えてきたという感じがするのですよね。地域の子育て支援と言っているが、支援ではなく、自分たちが本当は主役になっていかなければいけないのではないかと、という、委員さんも言っていましたが、そういう部分もありますし、今、日本の子どもを取り巻く良くないことの1つと言われているのが、大人にコントロールされて遊んでいる子どもたちだといわれますよね。昔の子どもたちは、いろんな遊びをお兄ちゃん、お姉ちゃん、近所の人に教わってきたわけですが、それをお父さんやお母さんが滑り台はこうやって滑るのよ、とかブランコはこうやって乗るのよ、と教えているからちっとも子どもが伸びていかないと。他にも例がありますが、そういう話がありますが、地域の子育て支援を考えていくとその原点とは何だと考えると、家庭じゃないですか。そうすると、この協議会で家庭の人たち、地域の最初の単位である家族の人たちというのは、多少意に沿わなくても仲良くしなければならぬとか、自分の意向に合わなくてもお付き合いをしないといけないことが地域ではあるのだよというのを学習すべきであるなという、「べき」であるかはわかりませんが、そういうことをしないとお付き合いできない、というのが、今日出てきたような気がします。いろんな意見があると思いますが。そういう意味では、大雑把な地域とか、あまり面倒を見すぎるなとか、家庭では両親の気持ちは別として挨拶とか最低限のお付き合いはしないと、子どもは育たないとか。

委員

端的に言ってしまうと、自然が破壊されてなくなったことだと思うのですね。いまや車社会で、テーマパークなどに遊びに行く方が親は楽ですから。

副会長

でも、自然がなくても、親同士が仲良くすれば、異年齢でも遊べますよ。3歳、4歳、5歳、12歳でも、親同士が仲良くすれば、必ず遊べますよ。だから、地域が崩壊しているのではなく、家庭の人間関係が崩壊しているから地域の関係が作れないということがあります。

委員

そうですね。だからそういう社会になってしまったのですよね。自然が少なくなって、みんながばらばらになって行って、車に乗って遊んでいる。だから地域で行事をやってもなかなか集まらない。

副会長

集まりたくない理由は面倒くさいからなのですよ。

委員

我が家はディズニーランドへ行くのよ、などなど。

副会長

だからそういう部分を多少は踏まえていかないと、地域というのは作れない。

会長

すみません、かなり時間が超過してしまって、でもなかなか本音が出てよかったと思います。この調子でまた次回、よろしくをお願いします。

子育て支援課長

連絡がありまして、1点お詫びですが、この文化センター圏域の図面ですが、白糸台圏域のものが落ちておりました。本日作りまして次回お配りします。今回は3月23日午後2時からですが、会場が北の第二庁舎、郵便局の手前の庁舎になりますので、お間違えのないようお願いいたします。車の場合は、こちらの駐車場をお使いください。以上でございます。第1回議事録の訂正の関係ですが、訂正がなければ、これで決定とさせていただいて、公開の手続きを取らせていただきます。